



佐高 久美さん・良さん
Sataka Kumi・Ryo
(左から)

伊豆野 洋子さん
Izuno Yoko
(右)

佐高さん夫婦が受け継いだ柿の木は約100本。
「剪定がなかなか上手いかな」と試行錯誤しながら、
美味しい柿づくりに日々奮闘している。

苦労を喜びに… 家族でつなぐ柿づくり

たわねに実った柿の木の下
で収穫作業を行っているの
は、佐高さん夫婦。緑川から
吹いてくる風が心地いい甲佐
神社近くにある畑は、妻の久
美さんが両親から受け継いだ

もの。
「じいじは冬でも霜が減多に
降りないので、果物の栽培に
適していると思います」と話
すのは、手伝いに来た久美さ
んの母、伊豆野洋子さん。

柿の栽培は、約30年前に水
道設備業を営みつつ稲作も行
っていた伊豆野さん夫婦が、
老後の楽しみとして始めたも
の。「手入れが楽そうと考え
て柿を選んだのですが、こん
なに手がかるとは…。年中
大変でした」と苦笑いで振り
返る。以来、夫婦二人三脚で、
繁忙期には家族総出で柿を育
ててきた。

苦労話を尋ねると「苗を植
えてから大きくなるまでの間
は草取りが欠かせないが、本
業である水道工事業が忙し
く、人に頼んだところ苗まで
刈り取られてしまい、結局植
え直すことになってしまいま
した」と洋子さん。

現在は、太秋柿のほか、刀
根早生柿、平核無柿といった
渋柿の品種も栽培している。
渋柿にはアルコールを入れた
ビニール袋をひとつずつ掛け
る。そうすると熟成していく
に従い甘くなっていき、黒い
「ゴマ」が入った美味しい柿
になるそうである。袋がけの
作業は、少ない年で6千枚、
多い年には9千枚にも上る。

今年は雨が少なく、実の生育
が遅れるのではないかと心配し
たが、「この場所にはどうや
ら雨が降ったようで助かりま
した」と久美さんは土地の不
思議を口にする。

佐高さん夫婦が本格的に畑
を引き継いだのは、約3年前。
「手伝いはしていましたが、
全部引き受けてみると、これ
ほど大変だとは思いませんで
した」と久美さん。夫婦は、

宇城市の自宅からは毎日畑
に通い、柿の手入れを行って
いる。

実の収穫が終わると、剪定、
摘蕾、摘果、誘引など一年中
手のかかる作業が続く。

「柔道をやっていたので体
を動かすことには慣れている
つもりですが、柿の作業は特
に首にこたえます」という良
さん。定年退職するまでは公
務員だった。「妻の両親が大
切にしてきた土地。自分たち
のペースで楽しみながら大切
に育み、次の世代に引き継い
でいきたいと思っています」と
と静かでありながらも力強く
語る。

「良い柿を作ろうと思えば、
そのぶん手間をかけなければ
なりません。でも、知人に贈
れば喜んでもらえますし、収
穫はやはりうれしいです」と
洋子さんは言う。

洋子さんと共に柿の苗を植
えた夫、弘見さんは昨秋に
90歳で亡くなった。けれど、
家族による柿栽培は続いてい
く。渋い柿が甘く変わるよう、
苦労が喜びに変わるようお願い
ながら。